

コア・ノンコアワクチンの分類

🐕 犬のワクチン

⚙️ コアワクチン（必須）

- ジステンパーウイルス (CDV)
- アデノウイルス (CAV-1, CAV-2)
- パルボウイルス (CPV-2)
- 狂犬病（流行地ではコア/日本では法定）
- レプトスピラ（流行地ではコア）

☆ ノンコアワクチン（状況に応じて）

- パラインフルエンザ
- ボルデテラ
- ライム病
- 犬インフルエンザ

🚫 非推奨ワクチン

- 犬コロナウイルス (CCoV)
- ジアルジア



コアワクチン：すべての犬・猫が接種すべき基本ワクチン
ノンコア：地域や生活環境（室内外・多頭飼育など）によって接種を検討
非推奨：科学的根拠が不十分、または効果が限定的で一般的に推奨されないもの

🐈 猫のワクチン

⚙️ コアワクチン（必須）

- 猫汎白血球減少症 (FPV/パルボ)
- 猫カリシウイルス (FCV)
- 猫ヘルペスウイルス-1 (FHV)
- 狂犬病（流行地ではコア）
- 猫白血病ウイルス (FeLV)（1歳未満/外出猫/流行地ではコア）

☆ ノンコアワクチン（状況に応じて）

- 猫免疫不全ウイルス (FIV)
- クラミジア・フェリス
- ボルデテラ・ブロンキセプチカ

🚫 非推奨ワクチン

- 猫伝染性腹膜炎 (FIP)
- ジアルジア/マイクロスポラム

子犬のワクチン接種スケジュール

6～8週齢：初回接種

コアワクチン（ジステンパー、アデノウイルス、パルボウイルス）接種開始

9～12週齢：2回目接種

初回から2～4週間後、母子免疫が減少し始める時期

12～16週齢：3回目接種

前回から2～4週間後、重要な免疫獲得期

16週齢以降：最終接種

最も重要な接種。母子免疫の干渉がなくなり確実に免疫獲得

26週齢前後：追加接種

最終ワクチンから約10週間後に推奨

その後のブースター

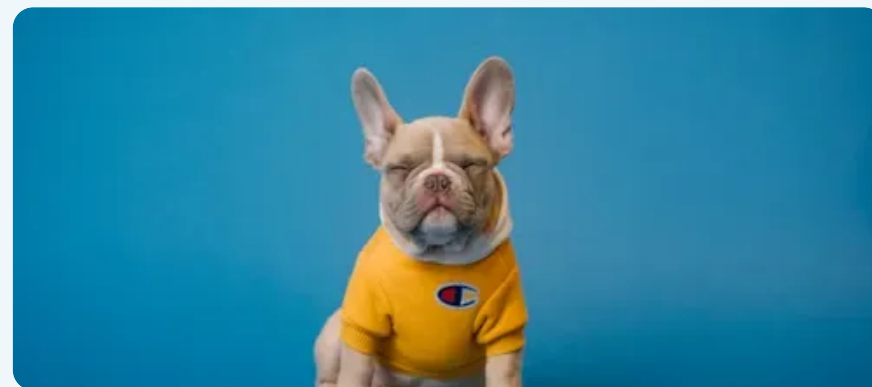
初年度接種から3年後、以降は3年ごとに追加接種

母子免疫とワクチン接種

子犬は母犬から「母子免疫」を得ますが、この免疫は徐々に減少。個体差があるため、複数回の接種と16週齢以降の最終接種が重要です。

重要なポイント

- ✓ 16週齢以降の接種が最も重要
- ✓ 1回のみ可能な場合は16週齢以降に実施
- ✓ 地域の感染リスクに応じて獣医師と相談



子猫のワクチン接種スケジュール



三種混合（コア）ワクチンの基本スケジュール

猫三種混合（FPV/FCV/FHV）は全ての猫に必要なコアワクチンです。

- 6～8週齢
初回接種開始
- 2～4週間ごと
追加接種を継続
- 16週齢以降
最終接種（最も重要）
- 26週齢（6ヶ月齢）頃
ブースター接種を推奨
- その後
3年ごとの追加接種



重要なポイント

16週齢以降の接種は母子免疫の干渉を避けるため必須です。接種費用に制約がある場合でも、16週齢以降の接種を優先してください。

猫白血病ウイルス（FeLV）ワクチン

WSAVAの2024年ガイドラインでは、以下の条件で**コアワクチン扱い**となります：

- ✓ 1歳未満の子猫（特に流行地域）
- ✓ 屋外に出る猫（他の猫との接触機会がある場合）
- ✓ 多頭飼育環境（特に新しい猫を導入する場合）

FeLVワクチンスケジュール

- 8週齢以降に初回接種
- 3～4週間後に2回目接種
- リスク環境の猫は年1回追加



成犬のワクチン接種スケジュール



成犬（26週齢以降）の初回接種

過去のワクチン履歴が不明でも、成犬（26週齢以降）であれば1回のMLVコアワクチン接種で十分な免疫が得られます。



3年ごとの再接種で十分

現代のMLVコアワクチンは長期間の免疫を付与します。多くの場合、3年ごとの再接種で十分な防御が維持できます。年1回の過剰接種は必要ありません。



ノンコアワクチンは環境に応じて選択

パラインフルエンザ、ボルデテラ、ライム病などのノンコアワクチンは、犬の生活環境やリスク評価に基づいて個別に判断します。



抗体検査の活用

ワクチン接種間隔の判断に、抗体検査の活用も推奨されています。特に副反応リスクの高い個体では有用です。

なぜ3年間隔なのか？



科学研究により、MLV（生ワクチン）は7年以上の免疫持続が確認されています



3年の間隔は安全マージンを考慮した推奨期間です



不必要な頻回接種は副反応リスクを高める可能性があります



適切なワクチン接種は犬の健康を生涯守ります

成猫のワクチン接種スケジュール



基本接種スケジュール

成猫（26週齢以降）では、過去の接種歴が不明でも通常1回のMLV三種混合ワクチン（FPV, FCV, FHV）で長期免疫が獲得できます。メーカー推奨は2回接種（2〜4週間隔）です。



追加接種（ブースター）

コアワクチンの追加接種は3年ごとで十分です。ただし、FCV/FHVワクチンは環境によっては年1回の追加接種が推奨される場合があります。



高リスク環境への対応

キャットホテルなどの利用がある場合は、利用の1〜2週間前にFCV/FHVワクチンの追加接種を検討します。また、FeLVワクチンは屋外に出る猫には必須です。



抗体検査による確認

ワクチン接種の間隔を判断するために、抗体検査の活用も推奨されています。特にFPVに対する抗体は長期間持続します。

リスク環境別ガイド



低リスク環境

完全室内飼い、単独飼育の猫
コアワクチン：3年ごと



中リスク環境

時々外出する、複数飼育の猫
FCV/FHV：1〜3年ごと、FeLV：推奨



高リスク環境

頻繁な外出、多頭飼育、シェルター
FCV/FHV：年1回、FeLV：必須



成猫は生活環境に応じたワクチン計画が重要です

完全室内飼いのワクチン戦略



猫のコアワクチン（3年間隔）

完全室内飼いの猫でも、三種混合ワクチン（FPV・FCV・FHV）は3年ごとの接種が推奨されます。感染リスクが低くても、基本的な防御は必要です。



犬のコアワクチン（3年間隔）

完全室内飼いの犬でも、ジステンパー・アデノ・パルボの三種混合は3年ごとの接種が必要です。狂犬病は法律で義務付けられている地域では年1回の接種が必須です。



原則不要なワクチン

完全室内飼いの猫では、FeLVワクチンは通常不要です。犬の場合も、パラインフルエンザやボルデテラなどのノンコアワクチンは基本的に不要と考えられます。



例外と判断基準

地域の流行状況や、将来的な環境変化（旅行・移動・複数頭飼育など）がある場合は、獣医師と相談の上、追加のワクチン接種を検討しましょう。

完全室内飼いでもリスク評価



室内飼いでも、窓やドアからの侵入者や来客からの感染リスクがあります



動物病院での待合室など、一時的な接触機会でも感染の可能性がります



将来的な環境変化（引っ越し、一時預かりなど）に備えた免疫維持も重要です



「低リスク」と判断しても、コアワクチンの接種は必須です。完全室内飼いでも、病原体は人間を介して持ち込まれる可能性があります。



室内外を行き来する・外出のある場合

📅 コアワクチンの基本スケジュール

犬・猫とも3年ごとの追加接種を基本とします。ただし、外出する場合は以下の追加ワクチンを検討してください。

🐱 猫のFCV/FHVは年1回追加を推奨

外出や多頭飼育環境では、猫カリシウイルス（FCV）と猫ヘルペスウイルス（FHV）の追加接種を年1回行うことが推奨されます。

⚠️ 猫白血病ウイルス（FeLV）は必須

外出する猫、特に1歳未満の若齢猫には必ずFeLVワクチンを接種してください。初回は2回（2～4週間間隔）、その後は1年ごとの追加が必要です。

🐶 犬のノンコアワクチンは生活環境で選択

パラインフルエンザ、ボルデテラ、レプトスピラなどは、犬同士の接触機会や地域の流行状況に合わせて獣医師と相談のうえ選択しましょう。

高リスク環境での対応

高リスク ボーディング施設の利用

施設利用1～2週間前に猫のFCV/FHVワクチン追加接種を検討

高リスク 多頭飼育環境

猫：FeLV必須、FCV/FHV年1回
犬：パラインフル・ボルデテラ推奨

中リスク 定期的な外出・散歩

猫：FeLV必須
犬：地域の流行に応じてレプトスピラ等検討



外出するペットは、コアワクチンに加えて
ライフスタイルに合わせた追加接種が重要です